



敗だろ。私には宣伝映画だ、と思わ
せてしまっただけで映画としては失
敗だろ。

○ 近代の闇闇の近代 ○
映画『長春 Eternal Spring』
プロパガンダに堕さない優れた映像作品

評論家



三浦小太郎
(みうら・こたろう)

昭和35年東京生まれ。著書に『信長 秀吉 家康はグローバルイズムとどう戦ったのか』(ハート出版)『ドストエフスキーの戦争論』(萬書房)

去る5月31日、東京の文京シビックセンター小ホールにて、映画『長春 Eternal Spring』の特別上映会が開催された。監督はジェイソン・ロフタス、そしてアニメーターは大雄。彼も中国・長春出身のコミック・アーティスト。現在カナダ在住。『スター・ウォーズコミック』(Dark Horse 出版)、『ジャスティス・リーグ』(DCコミックス出版)などのイラストを描く。武侠小说で知られる作家・金庸の挿絵も描いている。

これはアニメーションと3Dアニメ、そして実写によるドキュメンタリー作品で、私は正直このように作られた映画を見るのはほとんど初めてに近い。しいて言えば、北朝鮮の政治犯収容所の内部を3Dアニメで再現した『トウルーノース』がややこの手法に近いかもしれない。この映画のテーマは、2002年3月5日夜、吉林省

長春市のテレビチャンネルを法輪功修練者が「電波ジャック」し、中国当局が当時行っていた反法輪功キャンペーンに抗する映像(法輪功は反社会集団ではなく、共産党が宣伝していることは根拠がないこと)を放送した事件、そしてその実行者たちの悲劇的な運命を描いたものである。

事件の概要は、当時法輪功に対する中国政府の様々なネガティブ・キャンペーンに対抗するため、法輪功修練者数名が、自分たちの信ずる法輪功の真実を伝えるため、有線テレビの電波ジャックを実行、夜のニュース枠に、約50分ほど、法輪功の映像が流れたというものだ。実行者たちは電柱の配線を切ってDVDプレイヤーに接続し、夜7時のニュースを見ている各家庭に動画を流した。内容は、中国政府が、法輪功が焼身自殺を修練者に強要し

たというニュースに対する反論、中国政府が反社会的な邪法だとする法輪功は世界各国で受け入れられていることを訴えたものだ。電波ジャックそのものは成功したが、その後、中国当局は全面的な取り締まりに乗り出した。実行者の多くは悲劇的な死を遂げ、ほかに数千人が逮捕されたといわれる。

この事件は一度映画化されている。カナダの新境界影視公司(New Realm Studios)制作『電波ジャック50分の真実』(Eternal Fifty Minutes)である。私はほかにも、法輪功関係者や支援者によって製作された映画は見たことがあるが、正直、このような公的な媒体で紹介したり、知人に推奨したことはほとんどない。私の見た範囲の作品は、法輪功とその支援者にとっては重要な作品かも知れないが、基本、法輪功の教義の正当性を訴えるプロパガンダに思えたからだ。

法輪功修練者への中国政府の弾圧に対しては私は抗議し彼らの人権が守られることを訴える。しかし、それと

法輪功の教義に賛同するか否かは別だ。私のような立場の人間

に、これは宣伝映画だ、と思わ
せてしまっただけで映画としては失
敗だろ。

だが、今回の『長春 Eternal Spring』は、初めて、これは推奨できる映画作品だと感じた。もちろん法輪功の教義については肯定的に描かれている。しかし、この映画の中心的なテーマに沿った形でさりげなく語られるので、私のような外部の人間にもそれほどの抵抗感なく受け入れることができた。

以下、映画の内容を紹介していく。
インタビュアーとアニメーションで再構成される電波ジャック事件

アニメーターの大雄も長春出身である。この映画の冒頭は、まず、大雄が黙々と絵コンテを描いているシーンから始まる。そして、長春市街を舞台とした事件後の警察と実行者たちの激しい追跡劇が描かれていく。そして、大雄が再び画面に登場し、この事件をアニメ化するために、実行者の一人で現在韓国に亡命しているキム氏ほかカナダやアメリカの法輪功関係者にインタビューしていく姿が描かれる。

像化されていく様は、まさにその場で事件当時の情景と、実行者たちの信念、そしてその後に加えられた拷問のあり様が立ち上がってくるようだった。

そして、大雄が、当時は電波ジャックに懐疑的だったことを素直に語っているところも好感が持てた。彼はこの映画の中で、自分は事件当時から法輪功修練者だったが、その思想や教義にはほとんど興味はなく、健康のための気功や体操としてしか考えていなかった。この電波ジャック事件で、法輪功全体が危険視され逮捕されるのを恐れ、大雄は故郷を捨てて旅立ち、今は海外に亡命している。当初、大雄は、自分が故郷長春を離れなければならなかったことから、むしろ電波ジャックの実行者たちに不満すら抱いていたと率直に語っている。

前述した実行犯のキム氏の前で、大雄が、お互いの故郷である長春の情景を描いたアニメを見せるシーンは、思わず懐かしさのあまり涙するキム氏の反応を含め、この映画の中で最初に強く印象付けられる場面である。私は北朝鮮難民の関連で、旧満州、現在中国東北部の瀋陽と延吉には行ったことがあるが、長春は訪れたことがない。だが、延吉や瀋陽でも感じた、冬の寒さと降りしきる雪、中国朝鮮族の人々の街並みの風景、お祭りの様子などが、実に美しい故郷の情景として描かれている。大

雄も、キム氏も、この故郷に戻ることは中国共産党の支配が続く限り不可能なのだ。

大雄は、少年時代、この町で中国版のコミックに読みふけたことを語っている。そして感動したのは、歴史に現れた様々な英雄たちで、その姿が画面に水墨画風に描き出される。最も偉大な英雄は中国の少年にとつて岳飛だ。岳飛は中国南宋の武將であり、北方からの侵略を退けたものの、宮中の嫉妬や権力争いの犠牲となつて裏切られ、謀殺されてしまう悲劇の英雄である。後述するように日本やアメリカのコミックやアニメに深い影響を受けた大雄だが、少年時代にこのような伝統的な中国の英雄像に感動していたことは後々まで精神的に大きな影響を与えたはずだ。改革開放の時代に少年時代を送った大雄は、おそらくそれほど政治意識も持たずに育っていったのだろう。

そして、キムはこの作戦の組織者だった梁振興と、長春のケンタッキーで最初に出会ったことから語り始める。その模様が大雄のスケッチから、アニメーションに移っていく中、私たち観客は、この電波ジャックの作戦が討議され、実行されていくまでの過程を、様々な関係者のキャラクターの行動を通じて画面で再現されるのを見ることになる。

大雄は、実行者の誰一人として英雄的にも、また過剰に殉教者のようにも描こうとしない。彼らは信念を抱いているが、ごく普通の人間としてふるまっている。電波ジャックの前、風船とアドバルーンで法輪功のアピールを街中で空に飛ばし、その風船を警察が割るとチラシが自動的に撒き散らせるのを微笑みながら見つめる梁振興の姿は、むしろユーモアすら感じさせるものだ。

おそらく非暴力の形で人々に真実を伝えることこそ法輪功の教義に忠実な戦い方なのだというメッセージは込められているのだろうが、それは決してあからさまなプロパガンダにはならず、むしろ弾圧に対する柔軟な姿勢での抵抗の姿を感じさせる。

だが、より効果的な手段として、電波ジャックが提案される。もちろんこれは法律上の違反行為であり、実行すれば逆に相当の弾圧が降りかかることが予想される。この作戦を実行するにあたっては、理論的、精神的リーダーと思われる梁振興とともに「ビッグ・トラック」というニックネームで呼ばれる、かつてはアウトローだったが法輪功に出会い、修練者として覚醒した巨漢の運動家の役割が大きかった。だが、秘密のアジトを作り、電波ジャックのための様々な準備を進めるうちに、結構前に梁振興が逮捕されてしまう。動揺し、一時計画を中断

しようとするメンバーの前で、ビッグ・トラックは、梁振興はどんな拷問を受けても計画やアジトについて吐くことはないはずだ、むしろ、このまま計画を実行すべきだと皆を励まし指導していく。

電波ジャックが決行された夜、その後の警察による一斉捜査と逮捕劇、さらに激しく行われる拷問、多くの実行者の事実上の殺害の過程についてはこれ以上触れないことにする。ここで映画として印象に残ったのは、大雄が、実行者たちだけではなく全法輪功修練者に襲いかかる弾圧の嵐を、印象的な水墨画のタッチでその恐怖感を心理描写のように描き出した場面だ。これはスター・ウォーズやジャスティス・リーグのコミック版を手掛けているこの作家が、幼少時に読みふけた中国版コミックや、もともとのルーツである中国墨絵の伝統を引き継いでいることをはつきりと表している。彼が、武侠小说（要するに中国版チャンバラ劇）のイラストを書いていることもこれで納得した。

キムは逮捕後、生き延びるために、法輪功の教義を捨てて「転向」を誓わざるを得なかった。しかし、獄中でひどい拷問を受け続けながらも、梁振興は決してその思想を捨てなかった。獄吏たちは、転向を進めるよう、キムを梁振興の前に連れていく。だが、椅子に縛り付けら

れ、傷だらけになりながらも、梁振興は自分の信念はまったく変わっていないことを短い言葉でキムに伝えた。彼らの多くは獄中で死んだが、今、再び大雄のアニメーションによってこの世に蘇ったのである。かつて私はアニメーションの語源はアニミズムだ、という文章を手塚治虫の虫プロ関係者の回顧録で読み、印象的な言葉なので今も覚えているのだが、あらゆる生き物に、自然のすべてに精霊が宿するというアニミズムの精神は、同時にこの世を去った人々の靈魂もまた、私たちの記憶の中に残る限りそこでまた生き続けているという思想にもつながるはずだ。大雄がアニメという形でこの事件と実行者を蘇らせたことによって、この映画の中で彼らもまた永遠の生を得ることとなった。

中国共産党の最大の武器は情報操作と情報遮断

上映後、ジェイソン・ロフタス監督と大雄によるトークショーが行われた。ロフタス監督は、妻が長春出身の中国人であること、しかし妻は共産党幹部の娘であり、早くから海外に留学していたので、この事件や法輪功については実はほとんど知らなかったことを語った。そして、大雄とは、カンフー映画など娯楽作品を作る過程で出会ったこと、この作品を監督する上では、大雄の絵を

立体的な3Dにすることと、ドキュメンタリーであり、かつアニメーション映画であるという両面を実現するために構成上様々な工夫をしたことなどを述べた。同時に、このような題材を映画化することには様々な障害があることを指摘した。

まず、ゲーム業界もエンタメ業界も中国という巨大な市場を有しており、事実、大雄の関わったゲームは中国では販売できなくなった。そして、もちろんこの映画がさらなる迫害を生む危険性はあるし、実際、自分の妻の親戚にも脅迫がかかっている、しかし、現実にはこのような事件が起きていることは、海外にいる我々こそが広く訴えていかなければならないと述べた。

また大雄は、映画の中でも述べたように、実際に長春にいたときは、法輪功の気功には興味があっても、その教義には関心がなかった、こうして海外に出て、現実には迫害が進む中で、法輪功の教えについて深く考えるようになった。この映画に出てくる人たちは皆、正義を実現した人たちであり、私が最も伝えなかったことは、どんな厳しい弾圧下でも、正義を求め、それを伝えた人々がいたという事実だと述べた。

そして、会場からの、日本のアニメーションからも影響を受けましたかという問いに対し、日本のアニメで好

きな作品として『聖闘士星矢』や『鬼滅の刃』の名を挙げるとともに、今、世界は狭くなっている様々なコンテンツを知ることができる、あらゆる優れた作品から影響を受けているだろうと述べた。さらに印象的だったのは、中国共産党の武器は、軍事力や警察力以上に、偽情報によるプロパガンダとメディア支配、そして同時に外部の都合の悪い情報を国民から遮断することであり、自分は作品を作ることによってそれに抵抗していきたいと述べ、中国であれどどの国であれ、それ自体を敵とするのではなく、自分たちが悪しき人間になつてはならないこと、世界をより良いものにしていく努力の必要性を強調していた。

ここで明確に述べておきたいが、私は法輪功の教義には疑問や違和感を持っている。ただ、それは信仰や教義の問題であってここで議論したいとは思わない。私が問題にしたいのは、ウイグル、チベット、モンゴルなど、同様に中国政府から弾圧を受けている民族の問題についての法輪功の立場である。法輪功は、確かに共産党の弾圧を否定している。だが同時に、本来の中国の歴史と文明は、そのような各民族の文化を擁護し調和してきたものであり、中華文明は他民族の融和を基本とするのだ、というメッセージが、しばしば法輪功のアピールの中には感じるのである。

これは実は中国人（漢民族）の多数派が無意識のうちに共有している概念かもしれない。だが、現在、弾圧というよりもはやジェノサイドというべき状況にある各民族は、中国人に対して、最低限、中国各民族の民族自決権は普遍的権利として認める、という明確な言葉を求めている。たとえ悪意ではなくても、各民族の文化伝統を「中華文明」の一環とするような発想に対して、今、各民族の運動家が激しい抵抗感を抱くことは理解してほしい。何もその歴史観、文化観を捨てるというのではない。抵抗感を持つ民族がいること、彼らの中では、中国共産党と中国人とを、理性では分離しても、その情念においては分かちがたい抵抗感を持つ人々がいることを認識してほしいのだ。

そのほかにも、法輪功の主張に対し、私はいくつかの疑問は持つ。しかし、同時に忘れてはならないのは、ある団体が悪しき独裁政権によって弾圧を受け、信仰の自由が否定され、しかも臓器収奪及び売買という犯罪行為が行われている危険性が濃厚であるとき、その意見の違いによって抗議の声を上げることがためらっては、結局弾圧者に味方することになることだ。私はこの映画が多くの人の目に触れること、党派を超えてあらゆる人権弾圧に対し抗議の声が上がることを祈念している。